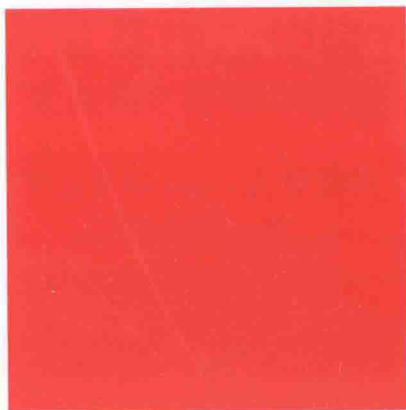


経済成長神話の終わり

減成長と日本の希望

アンドリュー・J.サター

中村起子=訳

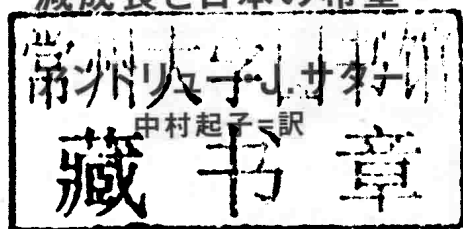


講談社現代新書

2148

經濟成長神話の終わり

減成長と日本の希望



講談社現代新書

2148

N.D.C.331 332p 18cm
ISBN978-4-06-288148-7

講談社現代新書 2148

経済成長神話の終わり——減成長と日本の希望

二〇一二年三月二〇日第一刷発行

著者 アンドリュウ・J・サター

訳者 中村起子 © Andrew・J・Sutter Yukiko Nakamura 2012

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

電話 東京都文京区音羽二丁目二二―二二 郵便番号 一一一八〇〇―二

出版部 〇三―五三九五―三五二一
販売部 〇三―五三九五―五八一七
業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕(日本複写権センター委託出版物)

複写を希望される場合は、日本複写権センター(〇三―三四〇一―二三八二)にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに

3

パートⅠ 経済成長は果たして善か

21

第1章 GDPと経済成長の正体

23

GDPとは何か／経済成長とは何か／成長統計／日本が抱える成長問題

第2章 経済成長と社会福祉向上の関係

40

検証…東日本の復興には、経済成長が必要だ／検証…経済成長は、年金システムの維持に

第3章

経済成長と環境問題

不可欠だ／検証…経済成長しないと、日本の国際的地位が脅かされる／検証…一人当たりGDP（平均所得）の上昇は、日本人の「生活の質の向上」に貢献する／検証…生産性向上によってもたらされた経済成長は、人々の余暇時間を拡大する／検証…完全雇用実現（もしくは、最低でも失業率の改善）には、経済成長が必要だ／検証…一人当たりGDPの上昇によって、社会的格差が是正される

59

第4章

経済成長神話の誕生

経済成長はより良い環境を作る？／「グリーンな成長」や「持続的な成長」もあり得る？／効率性／サービス産業と「知識」経済／持続性／成長の過程で環境を傷つけたとしても、市場の力や技術のイノベーションで直せる？

77

冷戦は終わらない／経済成長とイデオロギー闘争／冷戦の大きな置き土産／イノベーションとプロメテウス神話／「新成長理論」の勃興と落日／プロメテウスから金権政治まで

パートⅡ 経済の価値とは何か

第5章 大きいことは良いことか？

地球サイズの経済／数千年先のことを、誰が心配するだろう？

101

第6章 二つの価値

アリストテレスの壮大なアイディア／アリストテレスが言いたかったこと／葬り去られた「使用価値」／最大の矛盾／経済学があれば、倫理なんて必要ない？

108

第7章 間違った未来へ続く道

金融、その天文学的な世界／1980年代に何があったのか？／そして今日——1980年代がステロイド剤を打ったような時代／誰のために未来はあるのか／経済成長の偽ユーロピアから抜け出せ

128

99

パートⅢ 成長なき繁栄

第8章 「減成長」とは何か

他の指数を使う／経済成長に対する「定性的」な批判／デクルワサンス (décroissance)／なぜそれを「減成長」と呼ぶか

156

第9章 繁栄とは何か

「ハピネス」とは何か？／異なるタイプの幸福／公のハピネス／「幸せ」ではなく「繁栄」

172

第10章 減成長による繁栄とビジネス

減成長とビジネス／(1)航空事業／(2)プラスチック袋製造業／(3)プロダクト・サービス・システム／繁栄とビジネス／(1)社会事業／(2)協同組合／(3)市民事業／鯨と泳ぐ

191

153

第11章 減成長による繁栄と意義あるイノベーション

生産性から質へ／「産業的」「操作的」ツールから「共生的ツール」へ／「創造的破壊」から
耐久性へ／依存から安定へ／排除から共有（シェアリング）へ／切迫感から熟考へ

210

第12章 では、日本はどうすれば良いのか？

1 地方の活性化／オールド・ストリー…縮小、道を開く、資源を採掘する／ニュー・ストリー…ふるさとに人口を呼び戻す、「領域」を保存する／2 農業／オールド・ストリー…利益を増やし権力を温存する／ニュー・ストリー…文化と農業方法の保存／3 エネルギーと環境——エコタマエから行動へ／テクノロジーからツールへ／4 労働——労働とはなにか？／労働と家族／社会保障と起業家精神／5 高齢化と年金システム——年金システムの耐久性をアップする／子どもを増やすという解決法／6 ヘルスケア——医療を産業にするな／7 教育——なぜ教えるのか？ 何を教えるのか？／誰が教えるのか？／8 金融とグローバル化／減成長による繁栄の国家財政への影響／「開国」について／弱い円、弱い愛国心／「グローバル」ではなく、ポトム・アップ／9 すべてをまとめて考える

240

第13章 減成長による繁栄と民主主義

民主主義は単に政府の形態を指すのではない／イコライザーを取り戻せ／民主主義機構／

297

立候補について／市民社会組織（NPO及びNGO）の役割／新しい公共／民主的能力
（民主的コンピタンス）／まとめ

おわりに

経済成長神話の終わり

減成長と日本の希望

アンドリュー・J.サター

中村起子=訳

講談社現代新書

2148

1948年9月21日
1948年9月21日

1948年9月21日

1948年9月21日

はじめに

日本の未来をより明るいものにするにはどうすれば良いか。それが、この本のテーマです。社会が経済を支えるのではなく、経済が社会を支えるという、経済本来の基本理念をどうやったら取り戻すことができるのか。そして、GDPよりも人々の暮らしを優先する経済を作り上げるにはどうすれば良いのか。このようなことに焦点を当てます。

この本を美辞麗句ではじめるのは簡単です。たとえば「2011年3月に発生した東日本大震災は、日本人が持つ美点を改めて浮き彫りにした。私たちは、なんと素晴らしい市民だろう。米国をハリケーン・カトリリーナが襲ったときのような混乱は一切発生しなかった。国中に善意が溢れた。さあ、いまこそ美しく新しい社会を作ろう！そして、手に手を取って、日本経済を再び成長させよう！」

空虚だと思いませんか？

私がこれらの言葉の羅列を空虚だと思うのには、二つの理由があります。

第一の理由は、日本はこれまで、ほぼ一党支配と言える政治環境のもと、米国のあとを追うように不協和音と不平等を生み出す経済成長を追求してきたという点にあります。

米国でも、2001年9月11日に同時多発テロが発生したとき、先ほどの美辞麗句と同じような美しい希望が生まれました。これに関して、米国のジャーナリスト、フランク・リッチが最近こう述べています。

「私たちは、世界が恐怖に震えたあの日、ごく普通の米国人が救助に走り回る姿を目の当たりにし、煙がくすぶる廃墟のなかから、国民の連帯や無私の心などあらゆる市民の美德が生まれることを夢見た」

しかし10年後の米国はどうでしょう。政治的にも経済的にも、みじめで、分断された国になってしまっています。何百万人もの人が失業に苦しむ傍らで、政府は3兆ドル（約225兆円、1ドル＝75円換算）以上の巨費を、米国のためにも中東の平和のためにも役立たない戦争に投じています。そして、何兆円もおカネが富裕層のために浪費される一方、「財政責任」という名の下に、教育や警察のような社会の基盤となるサービスの予算が毎年削られています。

それが小泉純一郎政権のような米国妄信によるものなのか、野田佳彦政権のように先例を追従することしかできないからかはともかく、日本の指導者たちがやっていることは相

変わらず、結果的に日本社会を米国のような不平等社会に近づけることです。たとえば、「公平負担」という旗のもと、最貧層に最も打撃を与える消費税の率を上げ、富裕企業に対する税金を削減することなどがその典型でしょう。そして「経済成長を回復する」ために、「金融立国」して人々の住まいを「コンパクト・シティ」に効率的に集め、農業を産業化し、市場の力を「最大化」しようとしているのです。

だいたい、高齢化と人口減が進んでいるのに、過去20年経験したよりも高いGDP成長率を突然実現できるわけなどありません。単に数字を大きくするために、人々の生活をもっと困難にしようと言うのでしょうか？ この愚にもつかないレールから降りない限り、10年後の東日本大震災の追悼記念日は、同時多発テロ10周年追悼記念の日の米国のように、みじめで暗いものになりかねません。

先ほどの言葉が空虚だと思うもうひとつの理由は、「悲劇が人々の美德を引き出した」という言い方が正確ではないからです。

人々の美德は、災害の前からすでにあり、いまも綿々と続いています。

大地震が発生したとき私は東京にいました。その後ゴールデン・ウィークまで東京に滞在していました。その間の東京は、放射能汚染の噂が飛び交^かっていたことや、突然ガイジンの姿が街から消えたこと、トイレット・ペーパーなどの日用品のいくつかが一時的に入

手困難になったことを除けば、あまり普段と変わりませんでした。

ところがある日、通りを歩いていると、明るく元気なお年寄りの一団が、トイレット・ペーパーがぎつしり入った袋を手に集まっているのを見つけました。後日聞いたところによると、通りに店を構える魚屋さんが、西日本に住む親戚を通してトイレット・ペーパーを入手し、不自由している地域の一人暮らしのお年寄りに、無料で分けてあげたのだそうです。

このような行為は、日本では英雄的行動というよりは、親切に分類されるものではないでしょうか。そして、私は日本で、この種の親切を地震の前から毎日のように目にしてきました。日本人の日本人たる本当の伝統は、武士道だけではなく、ムラや下町の平等主義的な倫理観にあるのではないかと私は思います。今日も、日本に住むほとんどの人が、日本人なら自然に持つ親切や相互協力に対する価値観を共有しています。

このようなことが目に留まるのは、私が米国人だからかもしれません。でも実際、日本社会が持つ強固な基礎は、世界的に見ても極めてユニークです。日本に生まれ日本に住む人は、それを当然のことと捉えているだけなのです。

例をあげましょう。

日本では、生の食材が日々の食卓を飾ります。私がはじめて日本を訪れたとき、ある夕

食の席で鶏の刺身が供されました。米国では、鶏の刺身など食べられるところはありません。そんなものを食べたら、死ぬほど具合が悪くなってしまうからです。でも日本では、鶏の刺身を食べて具合が悪くなったなどという話を耳にすることは稀です。生卵も同様です。米国では、生卵を食べるなんて自殺行為です。

この生の食材の安全性こそ、長年受け継がれてきた強力な日本社会の信頼の輪を象徴するものです。考えても見てください。それらの食材は、漁師や農家の人々を皮切りに、トラックの運転手、卸売業者、倉庫業者、小売店、スーパーマーケット、レストランの従業員など、たくさんの方の手を経てあなたのもとへ運ばれるのです。その間、食材に薬品を投与したり傷ませたりする人が完全にゼロでなければ、生で食品を味わうことはできません。これは、本当にすごいことなのです。

この信頼の輪は、食品業界だけに限らず日本人の生活の多くに共通する特徴です。日本以外の国でこのような信頼の輪が存在するとすれば、それはごく小さい町のなかくらいなものでしょう。でも日本では、東京のような巨大都市にあってさえ、この輪が現代でも生きています。

経済のゴールを、特定の数字、たとえばGDPのようなものを大きくすることから、人間の生活を改善することに変革させていくには、この「信頼の輪」が絶対必要です。なぜ

なら、そもそも経済とは「経済」そのもののみを基盤とするのではなく、社会、倫理、政治、そして法律と文化の上に築かれるものであり、人々がお互いにどう助け合うか、人々の夢を国家単位でまとめた場合どんなものになるのか、ということをベースに作られるべきものだからです。

この自明の理を、私たちはなぜ見失ってしまったのでしょうか。

その理由の一つは、過去60年間、経済成長が政府の政策の中心だったことがあげられるでしょう。

政府が経済成長を重視した直接的な動機は、東西冷戦でした。第2次世界大戦後の米国と、日本を含むその同盟国は、どちらがより高い経済成長を達成できるか、ソ連を盟主とする共産主義圏と争いました。それは、爆弾や弾丸こそないものの、戦争と同じでした。ちなみに、武器弾薬の輸出はGDP成長に多いに役立ちます。

原発事故のメルトスルーによって引き起こされた問題を鑑みるにこの仮定は難しいですが、経済成長によって引き起こされた環境破壊を無視するなら、成長は短期的にはとても良いことだと言えるでしょう。実際、経済成長によって、日本を含む多くの国の人々の暮らしが改善されました。しかし、1980年代に東西冷戦が終結すると、金融市場を刺激するためという、経済成長を必要とする新たな理由が生まれます。経済成長の統計数値